

国土学事始め



大石久和

国土技術研究センター理事長

都の造営に当たってお手本とした長安などが、市域全体を城壁で囲ったのに対し、藤原京も平城京も都城を持ちませんでした。このことは歴史を学ぶときに、実に簡単に「わが国では城壁で囲むことはしませんでした」とあっさり学ぶだけですが、これはさらに

ての時代に都市城壁があったのです。日本以外では、文明国では、いつの時代にもどこの国でも、都市は壁で囲まれていたのです。

大きな都市では、壁の延長は何十キロにもなり、高さも30メートル近くに達するものもあったのですから、この建設の困難

「公共」の発見と共同体経験の欠如

と触れるだけでは許されないほどの重要な違いだと考えます。

さは想像を絶するものがあります。

藤原京から平城京に都が移ったのは、710年のことでしたから、まもなく遷都1300年を迎えます。最近、平城京跡が国営公園に指定されたり、2010年の遷都記念事業が閣議了解されるなど、奈良・近畿地方では話題となつていきます。

地域的に眺めると、中国にも朝鮮半島にも、ヨーロッパにも、ほとんどの都市には城壁がありましたし、時間の流れで見れば、文明の始まりの一番最初の頃から第一次世界大戦の終わりの頃まで、すべ

な壁の中に住まなければ命が危ういため、まず、城壁という装置としてのインフラを發明・導入し、さらに、狭い領域の中に人がまとまって暮らすための法律・命令という制度としてのインフラを開発する必要が生じたのです。

平城京に欠けていたものは、目に見える壁だけではなく、城壁などの装置インフラが不可欠的に重要であるという認識と、壁の中に住む皆が強い規制の下に共同体を構成するという意識、言い換えれば「公共」だったのです。

グローバル化していく時代に、われわれ以外の世界のすべての人々が共有している装置インフラ観と、共同体経験を欠いているという認識はきわめて大切だと考えています。